授与機関名　順天堂大学

学位記番号　乙第 2361 号

Combination Therapy of Glucagon-like Peptide-1 Receptor Agonists and Insulin for Patients who developed Diabetes after Partial Pancreatectomy

(膵部分切除術後に発症した糖尿病患者に対する GLP-1 受容体作動薬とインスリンの併用療法の検討)

北澤　公（きたざわ　とおる）

博士（医学）

論文内容の要旨

膵部分切除術後は、内因性インスリン分泌が低下し糖尿病を高頻度に発症することが知られている。膵部分切除術後の糖尿病患者に GLP-1 受容体作動薬と基礎インスリンの併用療法が有用であるかは、まだ明らかにされていない。本研究では、膵部分切除術後の糖尿病治療患者を対象に、持効型インスリングラルギンと GLP-1 受容体作動薬リキシセナチドの併用療法の有効性および安全性を検討した。膵部分切除術を施行した日本人患者のうち、術後に糖尿病を発症した患者を対象とした。インスリングラルギンとリキシセナチドの併用療法を 12 週間行い、空腹時および食後の血糖値、C-ペプチド、HbA1c、体重、内臓脂肪および皮下脂肪面積を測定した。リキシセナチド投与 12 週後、HbA1c は有意な低下を認め，全体の 80%が併用後に HbA1c 7.0%未満を達成していた。さらに食後 1 時間血糖値および食後 2 時間血糖値も有意な低下を認めた。血糖値のデータを個別にみると、全体の 90%が食後 2 時間血糖値 140mg/dl 未満を達成しており、食後の血糖値が良好にコントロールされることが明らかとなった。空腹時血糖は併用前後で変化がなく、良好なコントロールを維持していた。試験期間中に低血糖の発現はなく、臨床上問題となる有害事象の発現は認められなかった。本研究より、膵部分切除術後の糖尿病に対する基礎インスリンと GLP-1 受容体作動薬の併用療法は、良質な血糖コントロールを実現することが可能で、低血糖リスクが少ないことから、術後の有用な治療選択肢になることが示唆された。